

第27回FDフォーラム 報告集

第8分科会

初年次教育の「場」とは何か？： 3大学のコロナ以前・以後の事例を通して

報告者

鬼塚 哲郎 氏 京都産業大学 文化学部 教授
武上 茂彦 氏 京都薬科大学 分析薬科学系 教授
菊地 滋夫 氏 明星大学 人文学部 教授

コーディネーター

白鳥 秀卓 氏 京都産業大学 生命科学部 教授／
教育支援研究開発センター 副センター長

P1～ コーディネーターによる総括

白鳥 秀卓 氏

P4～ 講演1. 「京都産業大学の初年次教育プログラム
＜自己発見と大学生活2019～2021＞
ー3年間の軌跡とそこから学んだものー」

鬼塚 哲郎 氏

P10～ 講演2. 「京都薬科大学における初年次教育
～コロナ以前・以後の取り組み比較～」

武上 茂彦 氏

P24～ 講演3. 「＜他者＞とリアルに出会うー初年次教育の『場』とは何か？ー」
菊地 滋夫 氏

初年次教育の「場」とは何か？： 3 大学のコロナ以前・以後の事例を通して

コーディネーター 白鳥 秀卓 氏(京都産業大学 生命科学部 教授/
教育支援研究開発センター 副センター長)

○当分科会のねらい

初年次教育は、高校と大学の接続をする重要な科目として位置づけられている。ただし大学等によってその目的や方法は様々で、それぞれが特色ある授業を展開している。このたび、新型コロナウイルス感染症禍により、初年次教育の授業の多くがオンライン化された。本分科会では初年次教育のオンライン化の様々な事例を通して、そのメリット、限界等を客観的に捉えつつ、これからの初年次教育の「場」のあり方について考えたい。

○報告の概要

3つの大学の教員にそれぞれの大学の初年次教育の目的、方法、特色等や新型コロナウイルス感染症禍での経験等を具体的に報告いただいた。

講演1. 京都産業大学 教授 鬼塚 哲郎 氏

「京都産業大学の初年次教育プログラム <自己発見と大学生生活 2019～2021>

—3年間の軌跡とそこから学んだもの—

京都産業大学の初年次教育科目「自己発見と大学生生活」が紹介された。当科目は、初年次生に居心地のよい自己表現しやすい場を提供することで、自分自身が大学で何を学びたいのかを見つめなおし、今後の大学生活に向けてマインドセットを行う場として設置されている。クラスは学部横断編成で、1クラス66名、教員1名+学生ファシリテータ(学ファシ)2～3名で運営し、コロナ禍前は1グループ6名のグループワークが中心であった。前半7回は自己・他者対話と自己内対話を行い、後半8回はチームメンバーと対話しつつ協働し、振り返りを行っていた。

コロナ1年目(2020年)は、オンデマンド配信を基本とする個人ワークになった。コロナ体験をテーマにオンラインシンボを開催。教員・学ファシ・受講生から募集して文集「大学人の声」を編集、配信し、受講生はレポートで参加した。コロナ2年目(2021年)は、グループワークをTeams/Zoomで行った。グループでコロナ体験に関する課題に取り組み、ポスター発表をした。

コロナ体験から学んだことを、以下の3つにまとめた。①学ファシの活躍により、オンラインでもリアルタイム授業でグループワークが機能すること。②初年次科目で取り上げた、「コロナ体験」が教養教育のコンテンツとなること。「関係づくり、友達づくり」も他者の価値観に興味を持ち理解し合うという教養教育のコンテンツとなること。③対面、リアルタイム問わず場づくりは重要であり、オンデマンドではなく、学生を一定の時空間に集めることには責任が伴うこと。

講演2. 京都薬科大学 教授 武上 茂彦 氏

「京都薬科大学における初年次教育 ～コロナ以前・以後の取り組み比較～」

京都薬科大学の初年次教育について、推薦入試合格者など早期に入学が決まった学生に対する「入学前教育」、京都薬科大学独自にまとめられたアカデミックスキルをゼミ形式で学ぶ「アカデミックスキルゼミ」、医療をテーマとしてスモールディスカッション形式で行っている「基礎演習」について、主に紹介された。

初年次教育の「場」とは何か？： 3 大学のコロナ以前・以後の事例を通し

コーディネーター 白鳥秀卓 氏(京都産業大学 生命科学部 教授/
教育支援研究開発センター 副センター長)

「入学前教育」では、高校から大学への転換の土台作りを目的として、主体的に取り組む態度を育成している。さらに、入学前教育スクーリングを実施している。4名の小グループに5年生1名がチューターとして参加するワールドカフェ形式で行っており、コロナ禍前は来学型（対面）だったが、コロナ禍ではZoomのブレイクアウトルームを使用したオンライン型になった。オンラインだと、コロナ禍でもマスクをしないため素顔を見ることができるといった良い点もあるが、仲良くなりにくい、話し合いが盛り上がっているのかどうかなど他のグループの雰囲気がかみづらいいといった欠点もある。それでも、スクーリングを行うことで、入学前課題取り組みへのモチベーションはアップしている。

「基礎演習」では、コロナ禍前は薬物乱用問題をテーマにした防止教育など地域や行政と連携した社会活動を体験していたが、コロナ禍では活動が制限されているとのことであった。

リモートでは養うことが難しいものも多く、とくに大学生活の土台を築く初年次においては、できる限り大学で対面での学びが重要ではないかとまとめた。

講演3. 明星大学 教授 菊地 滋夫 氏

「〈他者〉とリアルに出会う ― 初年次教育の「場」とは何か? ―」

明星大学の初年次科目「自立と体験1」が紹介された。1年次必修、学部学科横断編成で1クラス30名、各クラスに教員とSA1～2名で運営している。異なる価値観・考え方・専門性を持つ多様な他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解することを目指している。自己理解、人と関わる力・考える力、自校学習、キャリア形成などに関する内容で、各回の授業進行は、「体験（個人で考える→グループで話し合う→全体で共有する）」と「振り返り（ポートフォリオに記入）」が基本である。

コロナ1年目（2020年度）は、初めはLMSを使用して、後半はZoomで実施したクラスもあった。LMSレポートを相互閲覧可能にして、他者の記述を読み考えることも推奨した。コロナ2年目（2021年度）は、ZoomとLMSを組み合わせで実施。全クラスにSAがついて授業をサポートしたことで履修者の評価も高かった。

コロナ禍を通して、①オンライン授業の普及、②学習データのデジタル化といった高等教育における2つの変化があった。利便性が評価され、反転授業が容易になるなどオンライン授業のポジティブな可能性もある一方で、授業内容を理解しにくいことや人との関わりがないことへの不満など、オンライン授業の安易な利用には危うさもある。コロナ以後の初年次教育では、オンラインの良さを加味することはよいが、対面を中心として、五感で他者を受け容れ、自らも受け容れられる経験が極めて重要ではないだろうかまとめた。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

参加者の皆さんとの質疑応答や総合討論を通して、本テーマを深めた。

講演1に対しては、学ファシがボランティアでも参加している理由や学ファシの研修などについての質疑応答が行われた。講演2に対しては、「入学前教育」の効果やスクーリングに参加するチューターについての質疑応答が行われた。入学前教育スクーリングを今後に対面に戻す可能性についての質問もあったが、入学前に友達ができることは大切で対面に戻したいとの回答であった。講演3に対しては、「自立と体験1」において特に盛り上が

初年次教育の「場」とは何か？：
3 大学のコロナ以前・以後の事例を通して

コーディネーター 白鳥 秀卓 氏(京都産業大学 生命科学部 教授/
教育支援研究開発センター 副センター長)

るテーマやクラス間の運用についての質疑応答が行われた。

総合討論では、「初年次教育の「場」としてのクラス規模」について、上限 60 名程度、参加者の多様性を確保する場合には少人数がよい訳でもなく、一定以上の規模が必要との意見が挙げられた。また、「ハイフレックス型」について、障害のある学生、留学中の学生など有効な局面があること、また、「ブレンド型（オンデマンドで学び、対面で密度の濃いディスカッションを行う。）」も有効だが、対面が軸であるといった意見が挙げられた。

複数の教員がクラス別に担当している科目で、共通のテキストで教員の裁量で柔軟に運用している場合の成績評価方法についての質疑応答も行われ、モデルケースやルーブリックに基づいて成績評価している、あるいは合否のみの判定にしているとの回答であった。

2021年度第27回FDフォーラム

第8分科会

京都産業大学の初年次教育プログラム ＜自己発見と大学生活2019～2021＞ —3年間の軌跡とそこから学んだもの—

京都産業大学「自己発見と大学生活」

統括 鬼塚 哲郎

副統括 中沢 正江・宮木 一平・西野 佳以

教材開発支援 川出 健一

F工房 大島 和美

初年次教育センター 長谷川 倫太郎

2019年度（コロナ前）の「自己発見と大学生活」

科目の理念

- 大学環境への移行を果たしたばかりの受講生に、居心地のいい、自己表現しやすい場を提供することで、受講生自身が大学で何を学びたいかを見つめなおし、今後の大学生活に向けてマインドセットを行う場。選択科目だが、学部によっては選択必修。

第1回～第7回：自分自身を発見する

お互いを
知る

先輩・社会人
の話を聴く

自分を
表現する

毎回変わるメンバーと自己-他者対話∞自己内対話

第8回～第15回：チームをつくり、表現する

グループで〇〇について
調査し、発表する

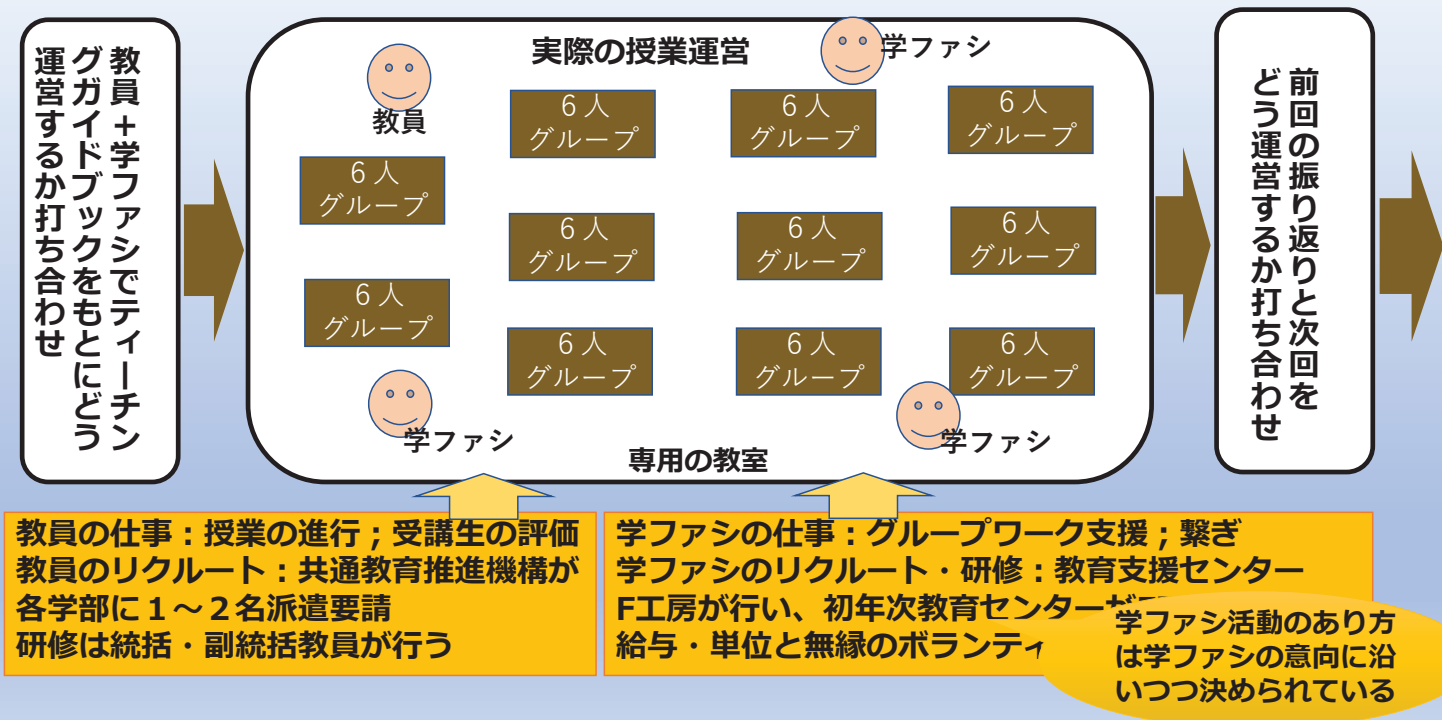
成長過程を
スピーチで表現する

固定されたチームメンバーと対話しつつ協働する・振り返る

授業の概要

- 初年次教育の一環として春学期15コマ、30クラス、1クラス66名、学部横断編成で運営
- ほぼ100%内製プログラム
 - ・ 独自に開発した教科書・ティーチングガイドブック。ただし実際の運用は柔軟に
 - ・ 24名の担当教員のうち21名が専任教員
 - ・ 評価はリフレクションノート（教科書分冊）中心

2019年度 授業運営の特徴

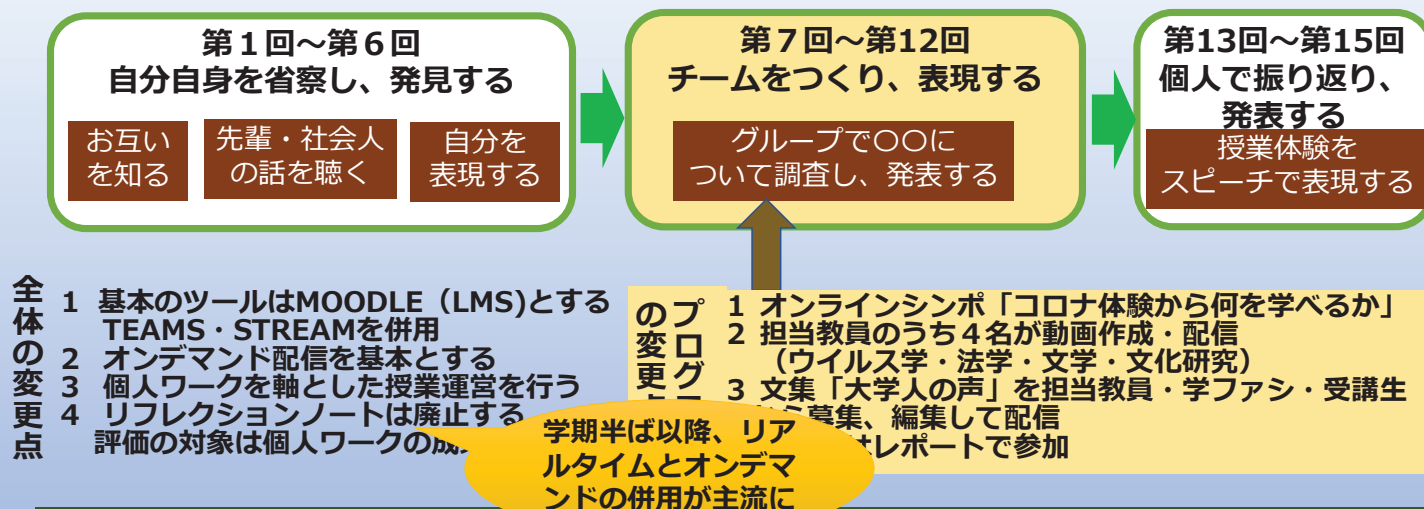


1回目の授業で学ファシが自己紹介しています



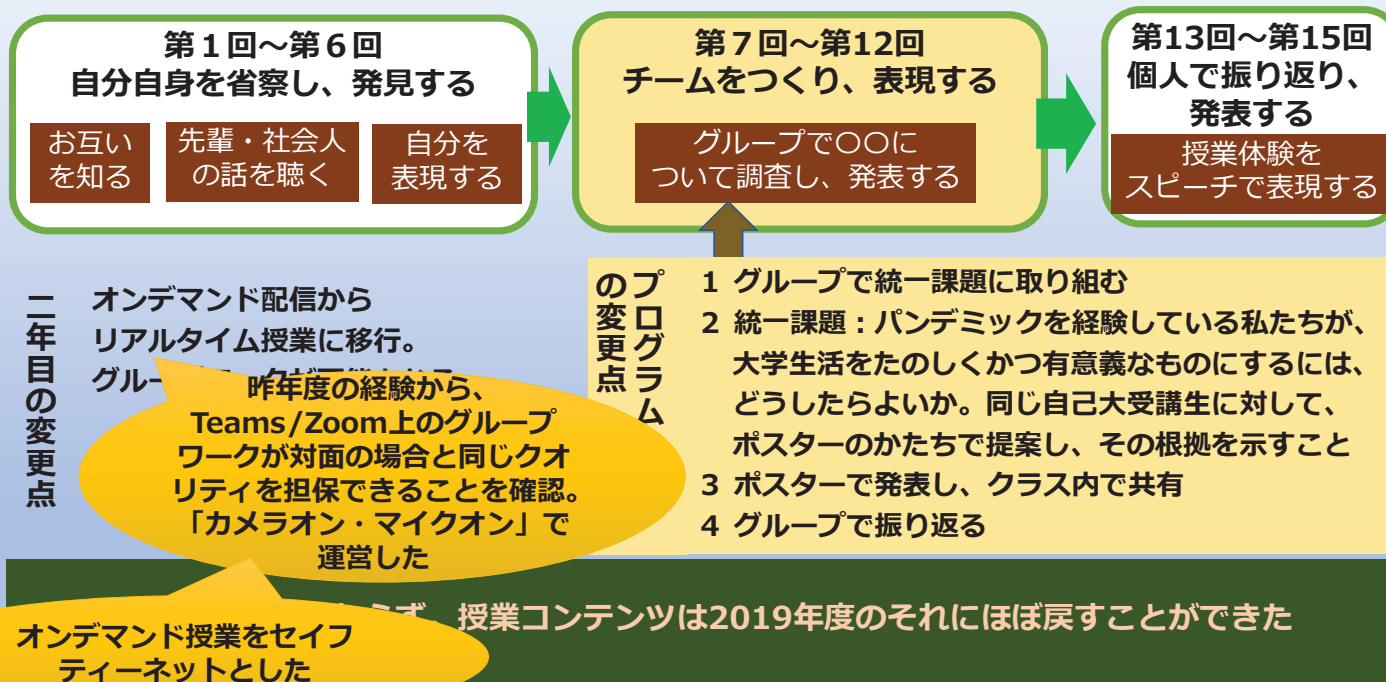
学ファシの一人が手順を説明しています

2020年度（コロナ1年目）の「自己発見と大学生活」



走りながら運営方法を考える状況
科目の理念は變更せず。授業概要ではグループワーク中心から個人ワーク中心にシフト
統括・副統括会議で授業コンテンツをどうオンデマンド化するか合議し、毎週発信

2021年度（コロナ2年目）の「自己発見と大学生活」



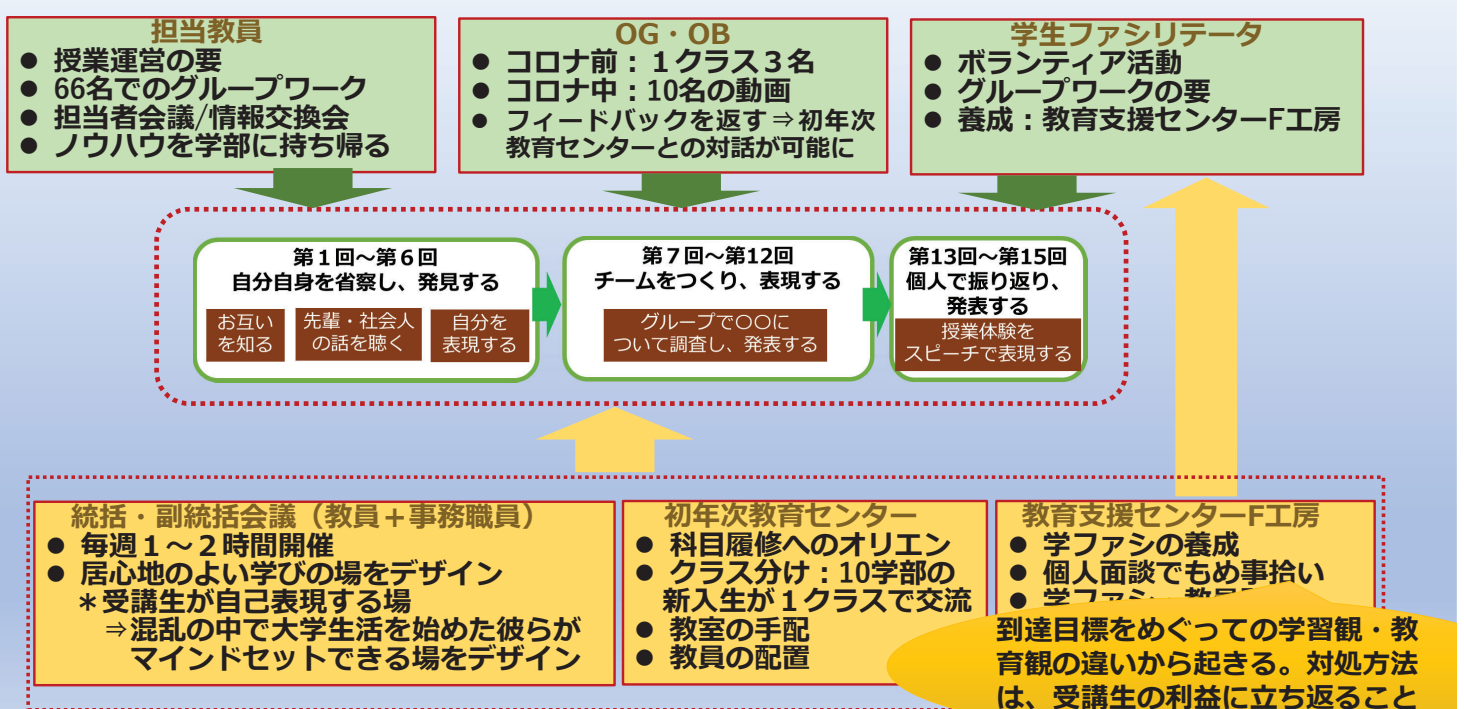


2022年2月 学ファシ研修の1コマ



同左 対面化後の授業を想定しつつ

「自己発見と大学生活」運営体制の特徴：2段階の協働



まとめ：コロナ体験から学んだこと

① リアルタイム授業でグループワークが機能した

- ・2021年度のリアルタイム授業においては、6者（担当教員・学ファシ・統括副統括・初年次センター・教育支援センターF工房・OG/OB）の協働が相互承認的な学習環境を生み出した。とりわけ学ファシの果たした役割は大きかった

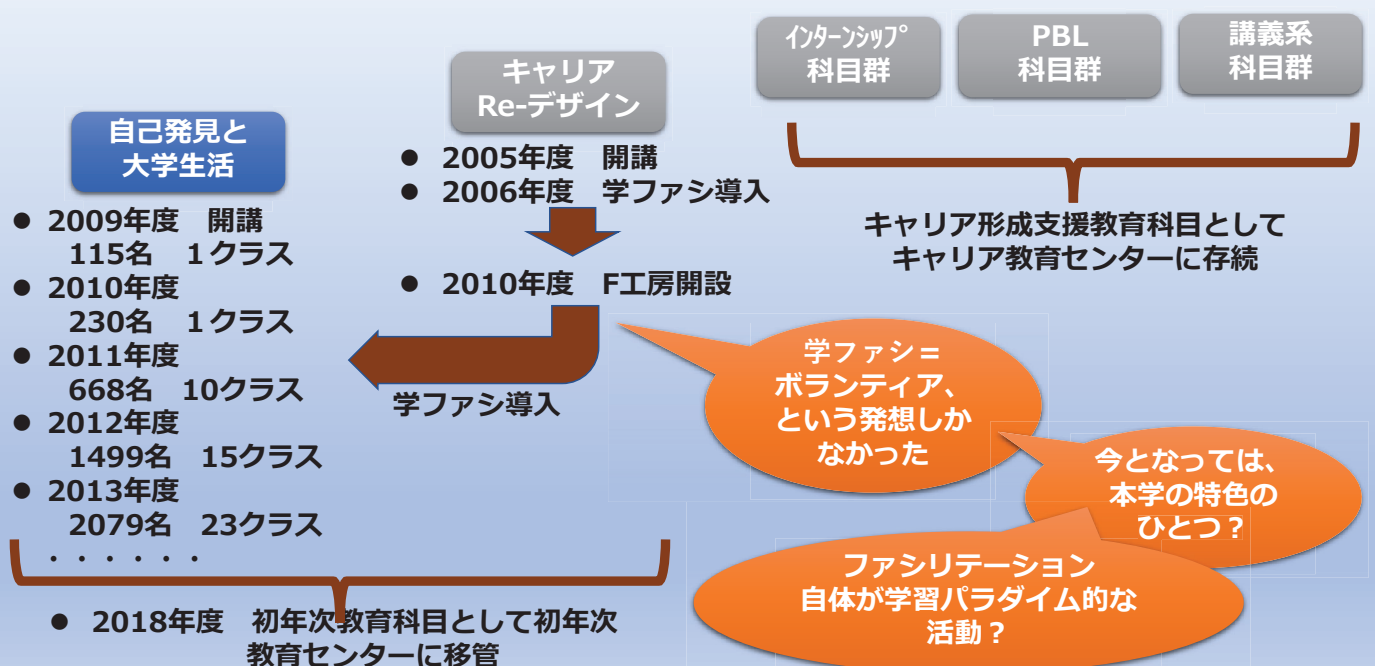
② 初年次科目もまた教養教育の一環であるとの認識を得た

- ・コロナ体験そのものが「共通の文脈（今、目の前にある私達の困難）」「多角的な学問領域・多様な背景から見えかたの変わる課題」として、教養教育のコンテンツとなりうるということがわかった
- ・受講生はコミュニケーションに飢えており（カメラ越しでも話せることが楽しい、嬉しいという反応）、「関係づくり、友達づくり」は、他者の価値観に対し興味を持つ、ある程度の深度を持って相互に理解し合う、という教養教育のコンテンツとして位置づけうるということがわかった

③ 場づくりの重要性は対面、リアルタイムを問わず存在することがわかった

- ・コロナ禍のもと、対面、オンラインを問わず、丁寧な場づくりがなされたうえでの受講生同士の「関係づくり、友達づくり」は、学びのコミュニティを形成していくうえで重要であるということ。学生は体験的に学んだ。このことは、大学に対し、「学生を一定の時空間に集めることの意味」を問いかけている

付録1：「自己発見と大学生活」の沿革 —キャリア形成支援教育科目から初年次教育科目へ—



付録2：受講生の満足度 —2019～2021 学習実感調査の結果より—

- 設問：この科目の学習を通じて、周囲の人と関わりながら自らを表現できるようになりましたか
「強くそう思う」「そう思う」と答えた人の割合（5点満点での平均点）

2019年度 4.27

2020年度 3.72

2021年度 4.21

- 設問：この科目の学習を通じて、自ら方針を立て、主体的に行動できるようになりましたか
「強くそう思う」「そう思う」と答えた人の割合（5点満点での平均点）

2019年度 4.11

2020年度 3.63

2021年度 4.10

- 設問：総合的にみて、この科目に満足していますか

「強くそう思う」「そう思う」と答えた人の割合（5点満点での平均点）

2019年度 4.27

2020年度 3.85

2021年度 4.28

付録3：学生ファシリテータの成長 —2019～2021 学ファシ活動に関する調査の結果より—

- 設問：受講生とは信頼関係を築くことができたか

「そう思う」「どちらかというと思う」と答えた人の割合

2019年度 71.8%

2021年度 80.0%

- 設問：ファシリテーションへの興味・関心が高まったか

「そう思う」「どちらかというと思う」と答えた人の割合

2019年度 83.6%

2021年度 97.1%

- 設問：学ファシ活動をしてよかったと思うか

「そう思う」「どちらかというと思う」と答えた人の割合

2019年度 97.5%

2021年度 100.0%

【自由記述欄】より

- サークルや部活にはいなかった自分からすると、自分が自分らしくいられるホームのような場所だった。
- F工房を利用しない人にはわからないと思うけど、F工房で実際に直接話すことによって、本音で話せる人や包み隠さず話せる人が非常に多くなった。
- 新入生の大学生活のサポートをしながら、自分も成長することができたと思う。
- 学部・学年を超えた仲間との出会いに感動する場面が多々あったし、受講生のレベルアップしていく様子が見られたのが何よりのやりがいだった。

京都薬科大学における初年次教育

～コロナ以前・以後の取り組み比較～

京都薬科大学
分析薬科学系 薬品分析学分野
武上 茂彦



自己紹介



2

■ 名前

武上 茂彦 （たけがみ しげひこ）

■ 所属

京都薬科大学 分析薬科学系 薬品分析学分野

■ 専門

分析化学

- ・ ナノ粒子と発光分析を組み合わせた疾患診断法の開発研究
- ・ 臨床検査用の化学センサーの開発研究

■ 大学内での役職

- ・ 入試広報委員長
- ・ 国際交流センター 副センター長

➤ コロナ禍に対する講義・実習の対応

- ◆対面からオンデマンドそしてハイフレックス型へ
- ◆学生の満足度は？

➤ 初年次教育の内容（目的、方法、特色）

- ◆入学前教育
- ◆早期体験学習
- ◆アカデミックスキルゼミ
- ◆基礎演習

京都薬科大学について

1884年 京都私立独逸学校として創立
（後に別科として薬学科開設）

1949年 学校教育法により京都薬科大学認可

薬学部薬学科（6年制）の単科大学

学部学生数：2236名
大学院生数：52名
（2021年5月1日現在）

あいがくきゅうこう

愛学躬行

Philosophia et Praktikos

コロナ禍に対する本学の対応



Kyoto
Pharmaceutical
University

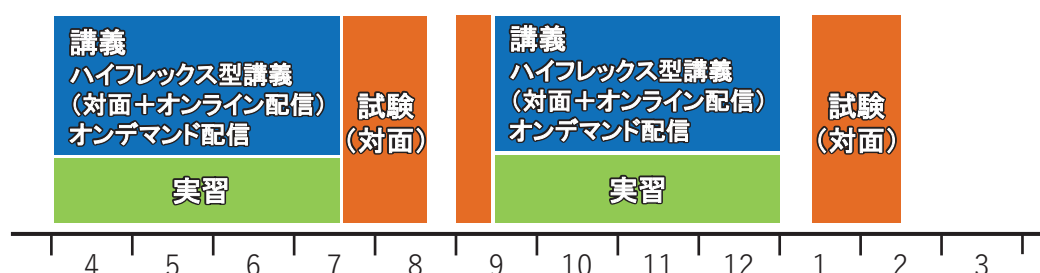
5

2020年度

休校 →



2021年度



学生の満足度調査 ①



Kyoto
Pharmaceutical
University

6

回答状況

実施日：2021年9月17日～10月4日（Microsoft Formsを利用）

	回答数	対象者数	回答率
1年次生	103	401	25.69%
2年次生	75	393	19.08%
3年次生	41	345	11.88%
4年次生	46	395	11.65%
5年次生	13	348	3.74%
6年次生	44	382	11.52%
大学院生	4	47	8.51%
無回答	1		
計	327	2,264	14.44%

学生の満足度調査 ②

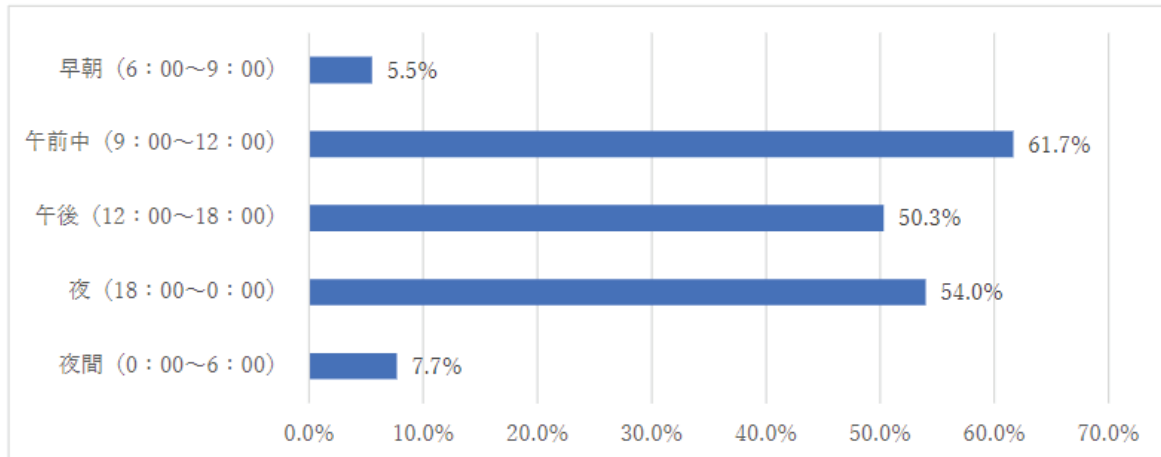


Kyoto
Pharmaceutical
University

7

Q. オンデマンド講義の主な視聴時間帯について教えてください。
(複数回答可)

N=326



➡ 深夜に視聴している学生が心配

学生の満足度調査 ③

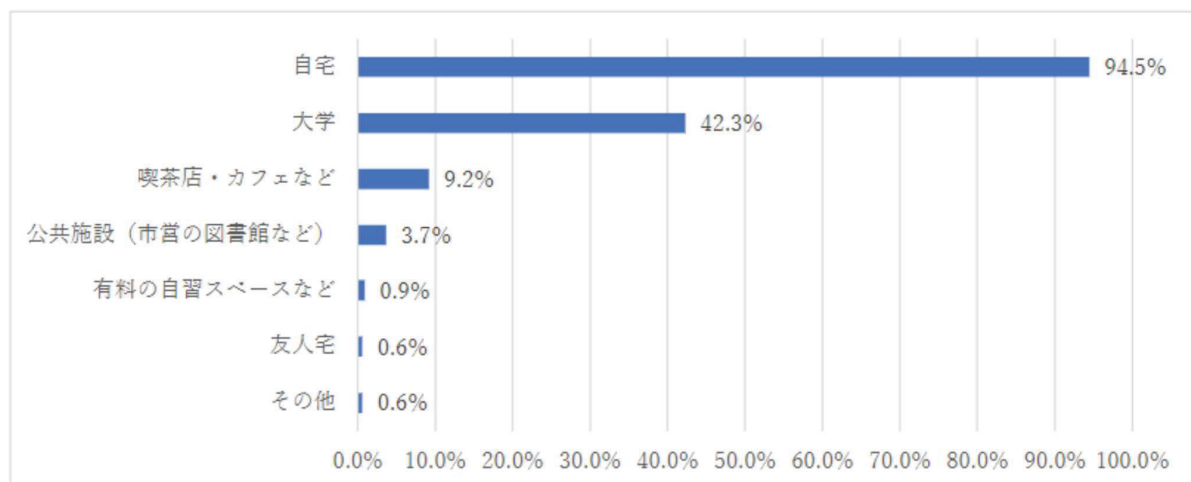


Kyoto
Pharmaceutical
University

8

Q. あなたの主な学習場所はどこですか。(複数回答可)

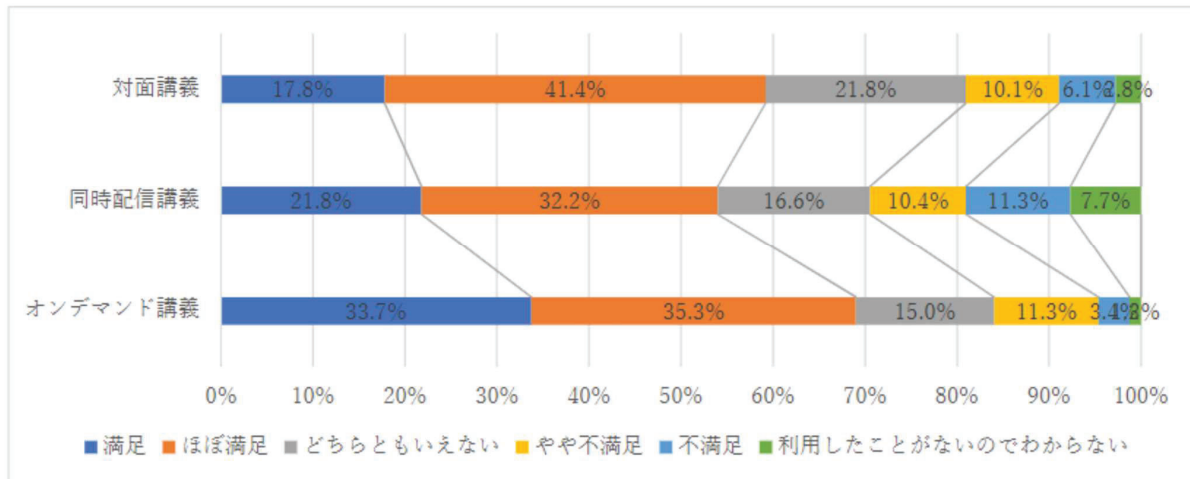
N=326



学生の満足度調査 ④

Q. 学習満足度をそれぞれ教えてください。

N=326

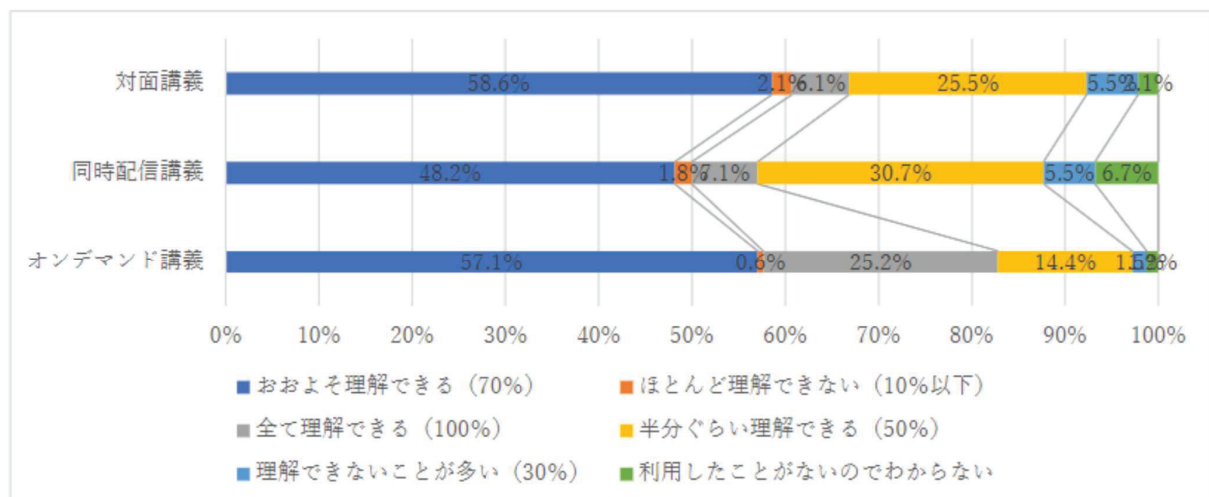


➡ オンデマンド講義は学生に好評

学生の満足度調査 ⑤

Q. 対面講義、同時配信、オンデマンド講義の学習理解度をそれぞれ教えてください。

N=326



➡ オンデマンド講義は学習理解度も高い

学生の満足度調査 ⑥

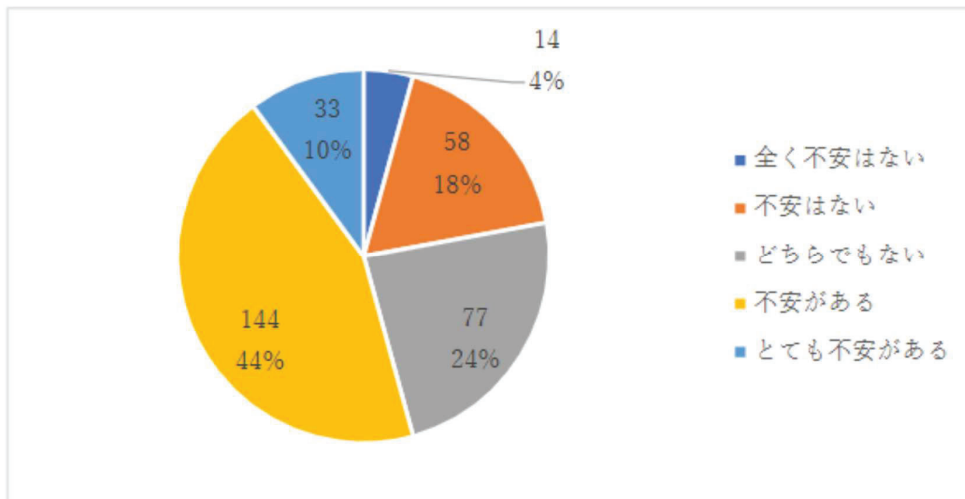


Kyoto
Pharmaceutical
University

11

Q. 社会がCOVID-19禍にある今、人との繋がりに不安はありますか。

N=326



➡ 半数強の学生が不安に感じている

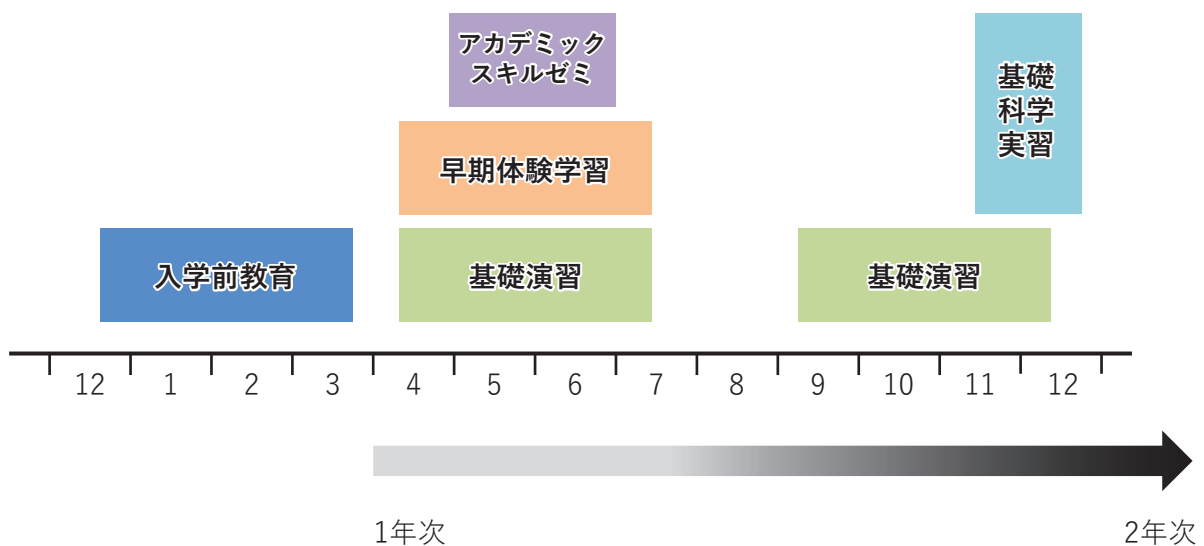
初年次教育



Kyoto
Pharmaceutical
University

12

1年次生 初年次教育関連のスケジュール（午後）



目的

- ◆ 「学習習慣」を身につける／維持する
- ◆ 「説明せよ」「～について調べ考えを述べよ」のレポート形式
- ◆ 高校から大学の学びへの転換の土台作り

➡ **正解は求めず、主体的に取り組む態度を育成**

課題

- ◆ 化学・生物・英語
- ◆ 物理
- ◆ 数学
- ◆ レポート「医療の担い手として大学での6年間で身につけたいこと」

入学前教育スクーリング ①

目的

1回目の入学前課題提出前に**入学前課題に取り組む意義**を考え、高校までと大学での学びの違いを理解し、大学で主体的に学ぶ態度を身につける、また、他者との交流を深め、入学後の**スムーズに大学生活が送れる**ようにすることを目的とする。

コロナ禍前

- ◆ 来学型（対面）
- ◆ ワールドカフェ形式



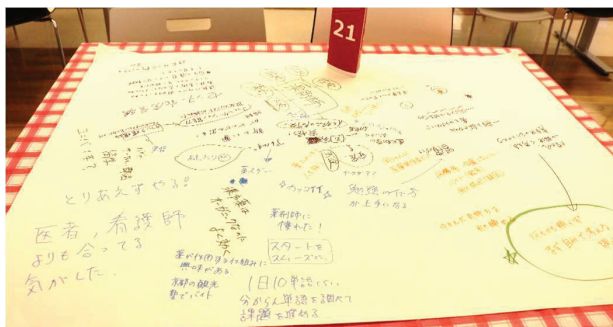
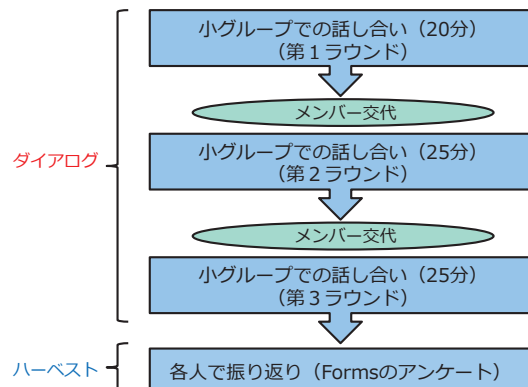
コロナ禍 現在

- ◆ オンライン型
- ◆ ワールドカフェ形式
(Zoomのブレイクアウトルーム)

問

1. これまでがんばってきたこと、趣味など
2. 薬学部を選んだ理由、なぜ薬や薬剤師に興味をもったのか
3. なぜ入学前課題が必要なのか、どのように取り組むか

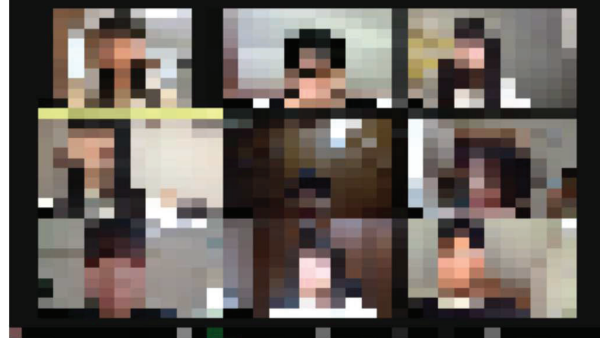
京薬・カフェの流れ



コロナ禍前



コロナ禍 現在



オンラインの良い点

- ◆ リラックスして参加できる (自宅という慣れた環境)
- ◆ 遠方でも参加できる
- ◆ 移動・用意などあまり無駄な時間が発生しない
- ◆ 素顔が見れる (マスクしないため)

オンラインの悪い点

- ◆ 仲良くなりにくい (話し合いの場では個人間で連絡交換がしにくい)
- ◆ 話し出すタイミングが難しい
- ◆ 他のグループの雰囲気がつかめない
- ◆ 介入しにくい
- ◆ 成果が見えにくい

➡ 課題取り組みへのモチベーションはアップする

目的

本学独自の書籍を作成し、アカデミックスキルを育成する

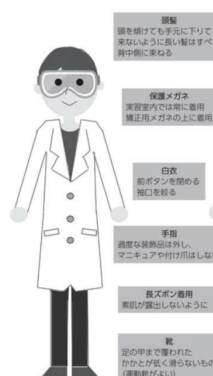
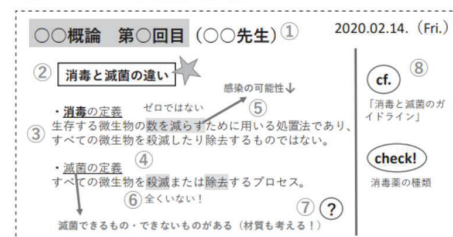


アカデミックスキルゼミ ②

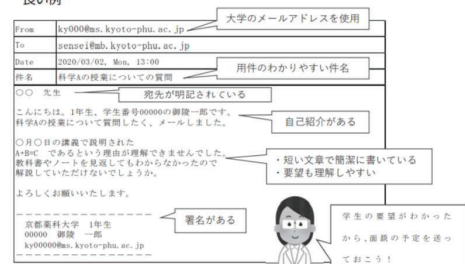
京薬生のためのアカデミック・スキル

1. 基本的な学びのスキル
2. 思考・表現スキル
3. 問題発見・解決スキル
4. 情報探索スキル
5. 協同的な学びのスキル
6. 実験・実習スキル
7. ICTスキル

⑥ノートに書くべきことの具体例 (参考)



良い例



最初に学生に伝えること



理系薬学版を作製しようと思ったきっかけ



理系薬学版アカデミック・スキル

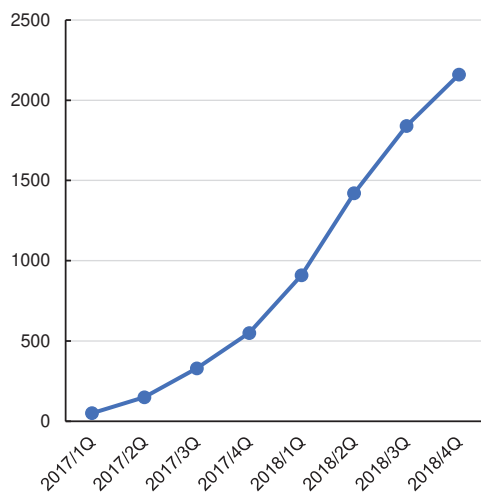
1. 科学リテラシー
2. 物事を考える力
(ロジカル・クリティカルシンキング)
3. 文章や図・表を読み取る力
4. 情報を判断する力
5. 図・表を描く力
6. 文章を書く・まとめる力
7. プレゼンテーション力
8. 質問力

インプット

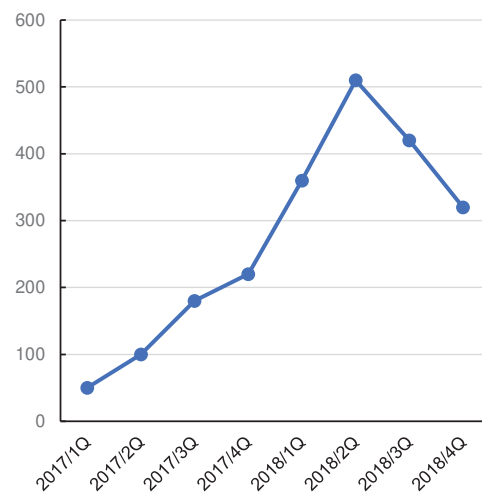
アウトプット

アカデミックスキルゼミ ⑥

あなたは、ある医薬品の営業担当者です。四半期別の売上高の報告をすることになりました。この医薬品の可能性をまだ信じており、意図的に図Aのグラフを作成しました。何が問題でしょうか。



図A：ある医薬品の四半期別売上高
－累計ベース



図B：ある医薬品の売上高
－四半期別

目的

- ◆ 「医療」がテーマ
- ◆ 学生10名程度の少人数教育
- ◆ アクティブラーニング
- ◆ スモールグループディスカッション形式

➡ 問題発見・解決型人材の育成

「**薬物乱用問題**」をテーマにした

- ◆ 警察等による防止教育がメイン
- ◆ 地域での薬剤師のかかわりが大事になってきている
(学校薬剤師や地域での薬物乱用防止教室)

➡ 地域や行政と連携した社会活動を体験

基礎演習 ②

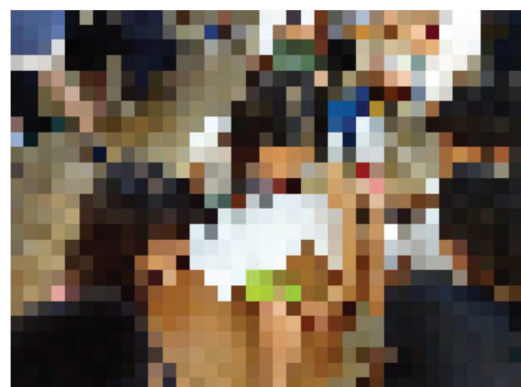
京都市立安朱小学校 「お薬教室」

対象：3年生、6年生

目的 | 3年生 (写真 右上)
クイズや実験を通して、薬を正しく服用することの大切さを学ぶ。



目的 | 6年生 (写真 右下)
カフェインが含まれている飲料の表示を調べることにより、「何がどれくらいあるのか」を確認することの大切さを学ぶ。



薬物乱用防止街頭啓発活動

参加者

京都薬科大学1年次生

京都市、京都府、山科警察署

山科区薬物乱用防止指導員協議会

カイロの作成（右上）

SGDでデザインとキャッチコピーを作成。

街頭啓発活動（右下）

地下鉄山科駅前にて作成したカイロを配布し、薬物乱用防止の啓発活動をおこなった。

→ 期待されている**将来像を体感**することが、今後の**学びのモチベーションアップ**につながる



早期体験学習

目的

医療人である薬剤師として身につけるべき「生命の尊厳」、「やさしさ」など豊かな人間性の涵養と、将来求められる「問題発見・解決能力」の重要性を下記のプログラムを通して肌で感じる。とにかく驚き、楽しむこと。

1. 「薬害根絶」のために薬害被害から学ぶ（対面 → オンデマンド）
2. 救命応急手当（対面）
3. 病院・薬局見学（対面 → オンデマンド）
4. 企業見学（対面 → オンデマンド）
5. 学内研究室見学（対面）
6. 選択プログラム
 - ・ハンディキャップ体験（対面）
 - ・薬用植物園見学（対面）
 - ・ようこそ先輩（対面 → オンデマンド）
7. プロダクト作成・発表・意見交換会（オンラインと対面併用）

大学とは、一定のルールの中で生活をし、勉強をしたり、友達を作ったり、クラブ活動をしたり先生に反抗したり、など様々な経験をし、将来社会において集団の中で自らを表現する術を学ぶ最後の場である。



リモートでは養うことの難しいもの

大学生活の土台を築く**初年次（1、2年次）**においては、
できる限り**大学で対面での学びが重要**ではないかと考える。

＜他者＞とリアルに出会う

－ 初年次教育の「場」とは何か？ －

菊地 滋夫（明星大学）

kikuchis@ge.meisei-u.ac.jp

内容

- 自己紹介
- 明星大学の概要
- 初年次教育と大学教育の組織的展開
- 全学初年次教育科目「自立と体験1」
- 学部学科横断クラスの始まり
- 多様な＜他者＞との出会い
- コロナ期間中の実践 2020年度／2021年度
- コロナ以後の初年次教育の「場」とは？

自己紹介

【氏 名】 菊 地 滋 夫（きくち・しげお）
【現 職】 明星大学人文学部教授
【学 位】 博士（社会人類学）
【専 門】 文化人類学、アフリカ研究
【出 身】 岩手県
【所属学会】 日本文化人類学会
日本アフリカ学会
日本ナイル・エチオピア学会
初年次教育学会
日本協同教育学会

写真
（当日Zoomで表示）

明星大学の概要

【開 学】 1964年（明星実務学校の創立は1923年）
【創 設 者】 児玉九十（明星学苑創設者・明星大学初代学長）
【教育目標】 自己実現を目指し 社会貢献ができる人の育成
【学 部】 理工・人文・経済・情報・教育・経営・デザイン・心理・建築
【大 学 院】 理工・人文・経済・情報・教育・心理
【通信課程】 教育（学部・大学院）
【学 生 数】 8,476名（通信課程を除く2021年度の学部生）
【所 在 地】 東京都日野市

1 キャンパスに多様な学部・学科・学系・コースが集積
体験的な学びや教員養成に特色

初年次教育と大学教育の組織的展開

- 2000年代以降の大学教育改革：組織的展開は特徴のひとつ
- 明星大学では、2010年度より学部学科横断クラスを最大の特徴とする全学初年次教育科目「自立と体験1」開講、明星教育センター（MEC）設置
- 学部学科横断クラスを編成して初年次教育に取り組む大学は増加
 - 私立大学：日本大学、京都産業大学、神戸常磐大学、東京家政大学など
 - 国立大学：九州大学、大阪大学など

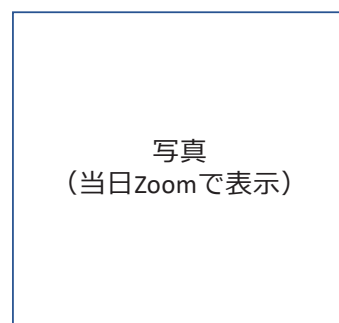
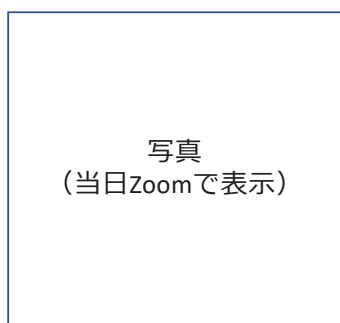
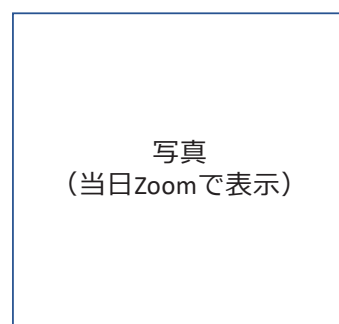
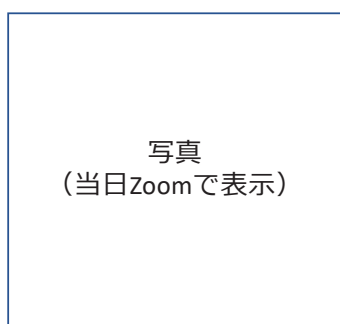


それぞれ特色ある学部学科横断型初年次教育を実施

全学初年次教育科目「自立と体験1」

- 【授業情報】 1年次必修科目，学部学科混合30人，全70クラスで実施，2単位
- 【担当教員】 専任・常勤・特任および非常勤教員48名，各クラスにSA1～2名
- 【教育目標】 明星大学に学ぶ学生としての自己理解を助け，各自の理想や目的を明確にしていくこと
- 【到達目標】 他者との関わりを通して自己理解を深め，明星大学で学ぶ自分自身を理解すること
- 【授業内容】 「自己理解」「人と関わる力・考える力」「自校学習」「キャリア形成」
- 【授業進行】 各回の授業進行は「体験」と「振り返り」が基本

体 験	個人で考える ⇒ グループで話し合う ⇒ 全体で共有する
振り返り	ポートフォリオに記入

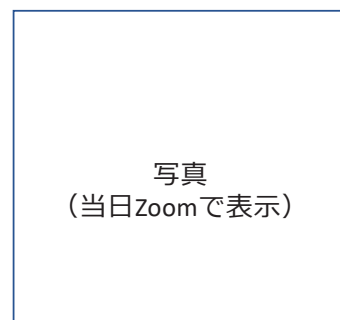


学部学科横断クラスの始まり

- 21世紀初頭，学力・学習意欲の両面で困難が顕在化
- 教室から押し出されるように学生たちとフィールドへ



タンザニア連合共和国ザンジバルにて
2006年より「フィールドワーク」開始



- ・ ザンジバルでの言語・文化・宗教・価値観などが異なる<他者>との出会いと語らいが，学生たちに反省的思考を促し，視野を広げた。
- ・ 「明星大学にも様々な違いを超えて語り合える場所があれば」との**学生たちの声**が「自立と体験1」の学部学科横断クラスのルーツ。

多様な＜他者＞との出会い

- 異なる学部・学科・学系・コースの同級生
- SAとして授業をサポートする上級生
- 職員
- 卒業生
- 担当教員
- 学長

自分とは異なる
価値観・考え方・専門性
と出会う場

驚き・共感・憧れ・
疑問・反発... etc.

振り返り（反省的思
考）の振幅を最大化

協働する知性・学び
続ける力・幸福

※ 価値観の合う「仲間作り」「友だち作り」とは一線を画す
※ しかし、単科大学でも＜他者＞との出会いは可能

クラス編成の比較

視 点	同一学部学科クラス	学部学科横断クラス
【多様性】	基本的に多様化はNGと見なされる	積極的に評価（違いこそ価値）
【差異の意味】	学力や意欲の多様化（≒低下）	優劣ではなく相対的差異
【人物本位】	共通の目的の範囲内で個人を重視	目的の違いも含め個人を重視
【自己効力感】	成績が上位ならば	他と違う自分だからこそ
進路の【悩み】	話しにくい場合も＊	話しやすい
【流動性】	低い（4年間に及ぶ継続の可能性）	高い（1年前期のみ）
【関心／監視】	仲間への関心／逸脱（他者化）を監視	そもそも異質な他者への関心

＊たとえば、教育学部の学生は教師を目指すのが当然とされているため、
「教職をやめて民間企業に就職したい」とは言いにくい雰囲気がある

（菊地・御厨 2014）

【参考】

岡檀著『生き心地の良い町』(2013年)

自殺超大国ニッポンで、自殺率が
極めて低い町の条件とは...



著者が指摘する5つの＜自殺予防因子＞

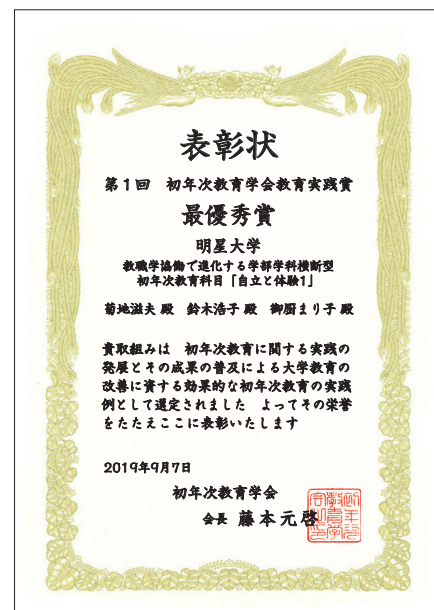
- ・【多様性】多様性を積極的に評価
- ・【人物本位】家柄や所属ではなく人物本位
- ・【自己効力感】どうせ自分なんて、と考える
- ・【悩み】悩みやトラブルはオープンに
- ・【関心/監視】ゆるやかにつながる(監視ではなく、関心)



→ これらは学部学科横断クラスの特徴にほぼ合致

(菊地・御厨 2014)

- ・ 離籍率の低下／進級・卒業率の上昇
- ・ 『教育学術新聞』「教授法が大学を変える」
(日本私立大学協会、2014年2月12日)に選定
- ・ 取組の継続性と改善，全学的な組織的取組と浸透度，などの点において，類似の取組を行う大学にとって有益なモデルとなりうる。



日本高等教育開発協会JAED Good Teaching Award受賞 (2014年3月31日)

第1回初年次教育学会教育実践賞「最優秀賞」受賞 (2019年9月7日)

コロナ期間中の実践 2020年度

2020年度の対応状況

- 「学生・教職員の生命と身体の安全確保」「学生の学修機会の保障」の両立
- 授業は明星LMS(manaba)とZoomで実施（教員の判断で選択し併用も可）
- 準備期間を経て4月22日より授業開始，当初は前期中の対面授業実施を模索
 - 結局、前期は「実験科目」「実習科目」のみ集中講義形式で対面授業を実施した
- 前期の「講義科目」「演習科目」は遠隔授業により全13回で完結
- 「自立と体験1」はLMSとポートフォリオ（冊子）を組み合わせで実施
- 明星教育センター（MEC）教員が学部選出教員を手厚くサポート
- 9回目以降の授業では，クラスによってZoomを併用（53／70クラス）
 - 教員によってZoom授業への習熟度が異なるため，均一には実施せず

無理なく，トラブルなく授業の実施は可能に

コロナ期間中の実践 2020年度

非対面授業でのアクティブラーニングの実践

- LMSレポートを相互閲覧可に設定，クラスメンバーの記述を読む課題も
- 掲示板やプロジェクト機能も活用し，他者の記述を読み考えることを推奨
- 考える力をつけるため，振り返り・概念化ができるレポートの多用
- 53／70クラスでは，1～5回のZoom授業も実施

非対面授業でも，学生が多様な他者とふれあい，主体的に考え，相互に交流し合う「自立と体験1」の特徴を活かす工夫

コロナ期間中の実践 2020年度

担当教員アンケートから見る成果と課題

▶学生の行動目標／到達目標は達成できたか

十分達成できた・だいたい達成できた	59.5%
どちらとも言えない	23.8%
あまり達成できなかった	16.6%
まったく達成できなかった	0%

▶MECが提供したレポート課題，コースニュース等を工夫・改善したか

定型を利用した	58.5%
工夫・改善したことがある	41.5%

▶役に立ったサポートは

「コースニュース(案)の提示」83%，「レポート課題のインプット」86%，「授業実施情報の提供」71% など

コロナ期間中の実践 2020年度

学生アンケートから見る成果と課題

▶この授業を受けてよかったと思う点

「LMS課題を通して他学部の学生の意見を知ることができた」「相互閲覧で他の人のレポートが読める」など

▶この授業で『もっとこうだったら良かったのに』という点

「文字だけでは伝わらない」「対面だったら良かった」「Zoomをもっと使ったらよかった」「自分のクラスではZoomを使っていないので交流が少なかった」「全部のクラスでZoomを使ってほしかった」

LMSのみのクラスでは，「自立と体験1」の特徴である「少人数クラス」「他学部・他学科の学生との交流」「グループでの学習活動」の有効性を問う設問の肯定的評価が低かった

コロナ期間中の実践 2021年度

全70クラスがZoomとLMSを組み合わせて実施（全15回）

➤全クラスにSAがついて授業をサポート（前年度はSAなし）

履修者から「○○○先輩がいつも授業を盛り上げてくれるおかげで、楽しく授業が出来ました」「○○○先輩の明るい雰囲気面白く、とても楽しい授業でした」「○○○先輩も面白くて、優しくて授業に参加しやすかったです」などの声が多数寄せられた

【背景】

- 2020年度前期はLMS課題型の授業が多く、「課題地獄」も発生
→ 学科によっては、前期からほぼすべての授業がZoomによる同時双方向型で高評価
- 2020年度後期になると全学的にZoomを利用した授業科目が急増
→ Zoom授業マニュアルを整備、関連する学内ミニシンポジウムも複数回開催

コロナ以後の初年次教育の「場」とは？

コロナ禍を通した高等教育の2つの変化

- オンライン授業の普及
- 学習データのデジタル化

しかし！



オンライン授業のポジティブな可能性

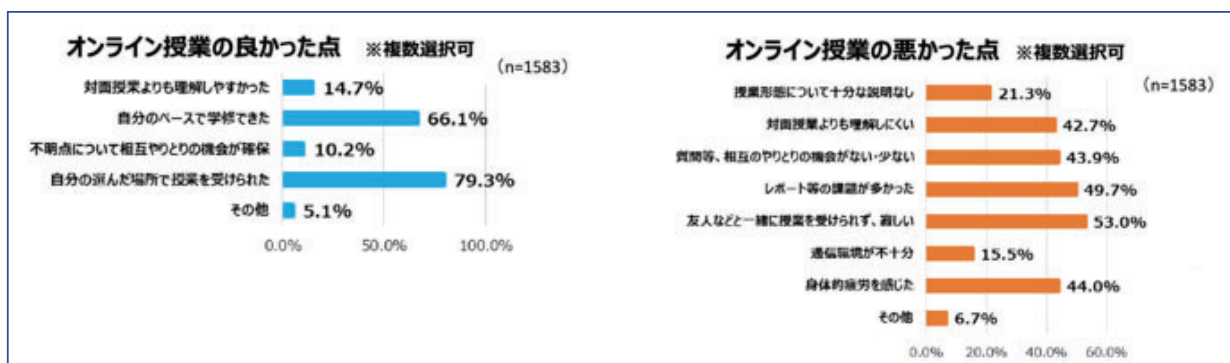
例えば、反転授業（動画の事前視聴 + 課題 + 対面でのディスカッション）は容易に外国の学生や海外留学中の学生との交流も可能に

デジタル化された学習データはeポートフォリオに蓄積

学びの可視化・教職員による支援・教学マネジメント・IRへの活用など

コロナ以後の初年次教育の「場」とは？

オンライン授業の安易な利用には「危うさ」も



2021年3月に文部科学省が大学生を対象に実施した調査より

➤利便性（都合の良い時間・場所）への 評価

➤理解のしにくさや人との関わりがないことへの 不満

コロナ以後の初年次教育の「場」とは？

東北大の学生を5人1組にし、学部の勉強や趣味について、対面とオンラインで会話してもらい、脳活動を比較する実験をした。…(中略)…よいコミュニケーションが取れている時はお互いの脳活動がシンクロし、揺らぎが同期するという現象が起きる。対面で顔を見ながら会話しているときは、5人の脳反応の周波数は同期していたが、オンラインではそれが一切見られなかった。脳活動が同期しないということは、**オンラインは、脳にとってはコミュニケーションになっていない**ということ。つまり、**情報は伝達できるが感情は共感していない、相手と心がつながっていない**ことを意味する。これが多用され続ければ、「人と関わっているけど孤独」という矛盾したことが起こってくるのではないかと推測する。

川島隆太氏（脳研究者）

※ 強調は発表者による

オンラインから対面に戻ったゼミ

写真
(当日Zoomで表示)

スマホでLMSの予習ノートを見ながらLTD（Learning Through Discussion）に取り組む
菊地ゼミの学生たち。教室のあちこちから拍手や笑いが起こる。2021年4月。

コロナ以後の初年次教育の「場」とは？

「やっぱり相手と同じ場を共有して対面している状況は、緊張感があるし、互いの言うことを信じたり疑ったりしながら、リアルな関係を築いている。**大学のゼミなどは、相手の表情や雰囲気を読みながら、暗黙知が飛び交い議論が深まっていくものですしね**」

山極壽一氏（人類学者・霊長類学者）

※ 強調は発表者による

知識やスキルの獲得のみに限定されない大学教育。

その入り口である初年次教育では、

五感で他者を受け容れ、自らも受け容れられる経験

が極めて重要ではないだろうか？

あくまでも対面を中心として、オンラインの良さを加味した初年次教育

コロナ以後の初年次教育の「場」とは？

連動する重要課題

➤キャンパスの再定義

- キャンパス，そして教室とはどのような「場」になるべきか？ 大教室はどうする？
- 「リアルなキャンパス」と「バーチャルなキャンパス」をどう接合／分節する？
- 障害のある学生にとってオンラインが有効な場合もあり，それも含めて再定義が必要。

➤カリキュラムの構造改革

- 1年次の履修科目は一般教養や概論などの大人数講義が中心のまま？
- 大人数講義の多くがオンデマンド化して本当に大丈夫か？
→ 通学が面倒な学生は歓迎？ 人件費を抑えたい経営陣も歓迎？ だが，学生生活の質は？

参考文献・ウェブページ等

岡 檀

2013 『生き心地のよい町 この自殺率の低さには理由（わけ）がある』講談社。

菊地滋夫・御厨まり子

2014 「学習意欲と自尊感情をいかに高めるか ― 学部学科横断クラスの効果と導入への課題 ―」初年次教育学会第7回大会における口頭発表。

菊地滋夫・鈴木浩子

2021 「コロナ禍における初年次教育の組織的展開―「自立と体験1」の経験から―」『初年次教育学会誌』第13巻第1号，pp.19-25，初年次教育学会。

全学共通必修科目「自立と体験1」新入生2,105名×全学横断のグループワークをオンラインで成立させた舞台裏（明星大学）

<https://www.meisei-u.ac.jp/note/20200731-01.html>（2021年9月8日アクセス）

参考文献・ウェブページ等

山極壽一「ニューノーマルをつくる世代に伝えたい体感と対話のある学びの面白さ」『国立大学』vol.59 March 2021、国立大学協会

https://www.janu.jp/wp/wp-content/uploads/2021/03/janu_vol59.pdf (2021年9月9日アクセス)

新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）（文部科学省）

https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
(2022年2月3日アクセス)

「遠隔授業 継続の動き…コロナ後の大学教育」（『読売新聞』2022年1月22日付朝刊）

「オンラインの会話、心は通じるか 視線・音声のズレ、実は孤独に？ 脳研究の川島隆太氏に聞く」（『朝日新聞』2022年2月3日付朝刊）

ご清聴ありがとうございました